

新・生物多様性国家戦略骨子（事務局案）の説明資料についての意見

平成14年1月26日

櫻村利道（福島市在住）

誤解による不適切なところがあるかも知れませんが、ご容赦下さい。

1) 生物多様性の内容として、希少種だけが先行している事実があるが、立地自然の多様性に密接に対応した自然生態系の多様な分化が種多様性を生み、支える基礎になっていることについても、希少種と同等、あるいはそれ以上に扱われるべきである。

2) 人間活動は種を絶滅あるいは分布域を縮小させるだけではなく、例えば尾瀬のシカのように逆に分布域を拡大して生態系を混乱させることもある。人間活動の影響を絶滅、減少といった単純な概念に集約するのは当を得ていないように思われる。尾瀬シカの事態は、自然の人為に対する巧まざる反応であって、恣意的に引き起こされた移入種問題とはまた別である。

3) 経済動向や国民意識の分析が必要としているが、経済機構や国民の意識は、生物多様性の喪失が何を意味するのか、具体的にシミュレートして見せて欲しいという段階にあるのではないか。調査・分析よりは啓蒙・指導の方が大切ではないかと思う。

4) 多様性の記述として動物は小分けにして植物は一つとするのはいかなものか。植物の多様性は一般には理解し難いだけに、動物は多様だが植物は単純だといった誤解を生み、生物多様性の実態を見損なう恐れがある。

5) 環境を一つ概念として捉えるのは徹底を欠く。自然環境と、その人為改変である人工環境とがあって、後者は前者に依存するという事情がある。ここで、人間の意向に従う人工環境を、そうではない自然環境と同一に扱っていると、自然環境も人間の意向でどうにでもなるといった誤解から独善を生み、結果として墓穴を掘る恐れがある。

6) 生物多様性と自然の物質循環の二本立てでは、「エネルギーは循環しない」という重要な事実が抜けている。我々は、長くみても300年はもたないという化石エネルギー資源の枯渇予測にもっと留意すべきである。それは地球温暖化問

題として捉えているという論もあろうが、限りある資源を、複合発電だ、プルサーマルだと云いながら結局は使い捨てにしなければならぬ悲しい現実を直視せず、エネルギー問題を循環論に含めて片付けてしまってよいものか。

7) 自然の再生・修復は容易ではない場合が多く、破壊と同列に扱って良いものだろうか。あてのない希望的観測を徒にあげつらったと非難されないよう、もっと丁寧に扱うべきである。

8) 生態系タイプといった類型把握は、記述のための便宜的な一法に過ぎない。自然に対する保護・保全の施業は、タイプでは括れない、細かく変化する自然の実態に細かく対応する、現場重視で順応的なものとなる。自然環境データが不揃いままの自然再生も、追跡調査なしの自然再生もあり得ない。そのため、施業内容を外（現場をよく知らない上部）で計画し、地区ごとに画一的施行を指示するといったものではない、計画と実施の新しいシステムが考え出されなければならない。予算の編成にしても、今までの行政慣行にはない新しい原則とプロセスが必要になる。自然との共生とは、そのようなものだと考えたい。

9) 自然の湿地は、希少種の生育場所としてだけ重要なのではなく、例えば脱窒を通して窒素の循環に一役買っているなど、生態系の機能要素として働いていることにも留意すべきである。人間は湿地のような嫌気性の環境を否定しながら、化学肥料として窒素を多量に散布している。このような実態にももっと目を向けるべきである。